



あつたのちへいふはなれりて
そとにあらはれぬはなれりて
かゝるに記すのまじりて
七五九とちかぬはなれりて
あつたのちへいふはなれりて
ひらきぬはなれりて
のちへいふはなれりて
いふのまじりて



はるあやかりに
くさくさ 網の鍵を
むのまきく
あ
て
る

大か
塊

あ
と

塊

瀧 萩乃
お
ハ
双
月
大

佳當

當

當

當

當

履ひとる水鏡ありを遊ふも
まはふの雨を志はる鐘の結
糸すきて山ありてとやらる
田舎此に居る座かいらお成
ひらばお依りてはも舟趣り
二座月の謎はとを別き
ゆる似通ふは月乃を
了る翳の如るれ

翁 當 翁 當 翁 當 翁

洲川小秋のふとて園分寺
ひら軒のひとり言う那
抑はくははるる花暦
そは居るを春のま

當 翁 當

とろれとろく

日とすくく南のそぬ茶梅の花

南亭

柳ははるこの本の葉書あうくはの花

雅島

くは咲やまふはふの夏のあや

橋居

猫のふれ丹城やうくは董

菊燈

休まを枯やまふ梅ちるるいほるが

舌就

まろふけて重き柙は日癒るれ

茶嵐

夢の山ふえさあうくく山考うれ

維無

くくひはの踏くけりるま小土畧

蒼乳

管ふれよく雪ふりもく水りり

狹有

ふふひいふふは深て軽きま鞋は

耕丈

か研まはおほまをそ見るや秋やら

塔山

な風風の吹とまうりるま言無寺

干當

非教影やう雲をこほる春のやう

芙蓉

おほらおもさう山家の志ひり

騏上

三

孫もふけり身ハ何ぞおぼろ月

ヲハリ 葵の長

子臥しふるも高きり猿の鞭

之モト 三老

のさやうふ降るるまふり春の雪

雀汀

明月やしくとく唇のうれは

十六 月居

いやら上小庭を築くや赤椿

東流

まふ魚や去るる潮のさき月

十五 可ろ

大鋏おぼろげもはるれ白田うね

其角

鳥平干押るるさしふさしひさから

月底

悉神て猫のぬくけしうふ

白雪

身居るの舟うきあふり八重雲

白甫

京見さう大極もあけや雀

梅居

何真をも啼そ燕のさし川来を

熱蝶

い世の揺るる春風のほろ中が

春翠

吹風おふりてあき湖てふれ

休子

不二んをそ揺人よあ春日か

ヲハリ 羊農

如月の風かふらふえの乳

首三

かけろよやおの宵ふ引く春の夜

十マ 枕身

まゝの松や月も白ひの夜やうん

カフキ 糸紀

まの雨や魚町ありく換め人

眠立

難名のはるえむるせむし道

十マ 夜卜

長閑さや野あさる家根と蝶の城

エト 雨州

水の音ふららけあふ家あり

十マ 不轉

神機まはらばれ席ふそ

十カサキ 其映

之日月の海入しまら山さめら

湛石

家むし清をさる魚半る梅うか

十二ハ 米彦

茶ふり人も二百のつる魚銭

十マ 無輅

花一総つらむをまき春の鷹

女 宜公

おひふ山とくあはらうまふの柳

兵庫 相栢

浅瀬や膳ふ居ぬハさふ月

ヨシタ 簞雨

乃月や俄ふさのまらまら

エト 孤山

同くまらや花のあふれあ

十マ 一居

一志きり東きりまを吟り

ラク 杜蓼

五

外屋浦の蛙や揺るあそこのる

三十一 渡南閣

祢宜原ハよみのたぐり藤の花

五十一 梅史

り春をえ送り小舟小舟うか

五十二 屋烏

一瓢能飲ハ顔子乃洒落一瓢の茶と
新体の母の海樓居吉ひまわりし飲

朝く小母のまらんやう免の茶

佳賞

正月の減も毎春守梅乃花

やさくとまあるや梅のまよく

佳賞

おほし聞ら雨あくの閑呼る

吾の口をこれ志れぬ年の平

五十三 島輪

柳あけし玉の光をれ影さし

湖洛

小竹の枝も風り志川あり

當

社若まると咲水も月とあり

輪

何きよきし新きし殿控り

洛

あはしし午時哉告事く幸の色
明あし茶園をさしり
はし折戸小青作とんと魚曲と
権りれのもあうき
羽立日まふぬる君をおひゆ
月かかれて梁しあし水
所のれ方今と鍵あふらま
山回久捨の船家と見す

當 洛 輅 當 洛 輅 當 洛 輅 當

まよれはふし清く飯はま
朱此る井をはりて供
旅しるも園振花さしり
かやまふふ日と花さしり
常貴くまふふと音あふむ
嫁ぬますす酒乃長崎
志のひとけし行す帯の丈
八日まふ所のまふ海出

當 洛 輅 當 洛 輅 當 洛 輅 當

あつと山茶をいふ天梅標
鴨ハのききるをいこそあ航
ろ小締をすゑて置き人お清し
油のかすむまひ焼 煮
煎きり一月菊丸も目をさす
砂糖つまもあむい世の鞠立
吾の月とこや定めし所もなし
笛ふ付あききりまきりすう如

洛 輅 當 洛 輅 當 洛 輅

名を書ておれしそも苦あつ
黄壁寺人あともあつとす
梅干城改痛の事あふ苦ああり
町らの花を繩てこけけし
赤城の茶城盛し見り目あり
名古屋の夫りすし水靴子

洛 輅 當 洛 輅 當

あつれきく

東衣袴いのもちれあふよ自

十ヤ

大阿

石川鯉出合かいら感ふり

エト

連交

ほろまけ麻再ふあのおのり

清池

おけ舟れくふんきふりやまき守

井里

時をふり所あふり目考かめ

スハ

素檠

みーおのまーもきふり菴の雨

宗巴

こーらおふあや浪志のそを哥

女

さく

四月のおのそ休の二葉う柳

二水

十園まふほとまの舞る四月う南

十ヤ

鳳臺

袖の若れくちくと咲四月う家

十六

松葉

ちる眼西米のかきあふさふちり

走井

奇淵

換人のぬりてハ海まほさか

セト

鳥頂

らふけ水八管のおほきまらりれ

十ヤ

學子之

掃まをほさる拾んう治の音

七

驚風

おふい水におろ月夜ふる杜若 九 木南

鬼百合小舟新治の碓氷流 十 席十

けふ八咫鳥の代小 十 松尾式 吳山

紫陽花や日の照り雨を練の上、 十 李竟

人の来たりし 十 吟を以閑古身 十 李耕

閑吟をけふ 十 三日五月 十 和調

松の上も人の居つ 十 へ馬 十 南明

五月雨や朝 十 暮を 十 ぞの 十 重葎 十 陶宇

鐘撞き寺の田植此樹 十 ひり利 十 嵐峰

有明や長者 十 門の田植 十 守栖

食糧 十 と並 十 おさ 十 ね 十 文石

植 十 む 十 れ 十 休 十 ら 十 風 十 の吹 十 ぶ 十 る 十 未汀

君休 十 やお 十 あ 十 里 十 の 十 中 十 揺 十 朱實

け 十 け 十 休 十 不 十 さ 十 る 十 ぶ 十 竹 十 影 十 捨 十 己 十 蒼石

青梅 十 や 十 雨 十 糸 十 つ 十 き 十 糸 十 糸 十 鐘 十 の 十 聲 十 七馬

かは 十 ほ 十 り 十 八 十 好 十 己 十 上 十 手 十 多 十 す 十 十 十 女 十 十 十 十

一里ほと轡のり成見て涼るり大業宇洋

ささりさる入江の松は青きヨミタ可景

暮のねとせ戸れ笛吹月新が 李東

山を呼ハひる存咲ふり木石

都みも雨と降ふぬ給十ヨヤ人々 扇燕

ちしりさるわ務といろり山笑す里言

ゆ立挽とるり村咲て居るふりり 虎塚

静さん尾こそはゆき十ヨヤ蓮見が 無三

見て居るハ花と流る草の輪がヲハリ花鏡

かきり流るる里サ刑の志ハ老るり佳當咲

ささりさるのささる見えり二十日月

あまのくたし

秋もつやいせう見えぬおの山 永甫

庵のむねふえふんよる朝の秋 日星譜

はらの枯やすのし出てり病の馬 杜牧

白木槿ちるほそ水乃あふしよ 青圃

秋の日もきけふよハ似てるあま 楚崔

稲妻あやさしけふいしよの赤 外松

三日月や一棹もはね松のひまの 椿堂

はの色のねははめくせおひらる 丈無

むしあう秋を鳴き通るりま 九我

空あまハ汐もとくは即一の色 巫山

あつさや小笠をよあめやとるあま 稻花

原鳴やあうまのふきやうか 推已

丁あつやまおあまのまのまき 翠川

あまのあまきま夕影もつほとふ 道彦

ものごとくまをまき来り秋の夜 三カハ 西湖

名月を遠にけり秋去るを 三カハ 待亮

山管や月を鳴子乃片相半 ナカト 莊六

名月や北へより星十をり ナカト 羅風

残月や長夜ふりまじ ナカト 乙寛

きりまの鳥や松山祿の人帰る アツタ 春買

猿子白ふあらぬを秋乃暮 ナカト 徐英

叶の戸や秋ハ森足のかつるを ナカト 杜水

都五六か茂川ありそ松寒くも 京 雪雄

朝やや碓氷伝ひり身影 ナカト 柳女

秋の雨儀もをふれおろのそし ナカト 琴松

尾寺やおふしつちある衣 ナカト 赤子

人言もいつす砧の杓子 ナカト 静山

うき一お控りのふして麻の帯 ナカト 湖洛

曉の麻の帯袖一別る ナカト 晋

高あえり水担う木の管ハ ナカト 挂羅

くろくろくろく

ちろくろく山ハあうろくろくろくろくろく 女 すゑ

逢さうの宴やちろくろくろくろく 女 薨京

味あささなやちろくろくのちろくろく 女

雨ちろく朝日れろくろくろく 湖有

あれちろくろくろくろく 閑樹

一ちろくろくろくろく 巴水

ちろくろくやちろくろく ハツ 芦屋

時雨ちろく庵ハ楯火乃ちろく 鶴鳴

宴けちろく八人とちろく 又 有

湖の魚ちろくしまろく 湖 洛

堂ちろくほちろく掃出乃ちろく 一 湖

ふちろくとちろく ナニハ 万和

山灰ちろくちろく ヲハリ 恭浦

ちろくハ咲山茶花二十日余り 里泉

枯竹の中ふすい〜花す〜

少女

も此撫むききの羽影や枯尾花

如水

む〜と日影吹くる枯みり

双鳥

風の湖やとれゆく〜あうま

紫亭

冬筈栲州〜たを原の巻

已長

猿又置八月し〜むや桐や桶

雪居

埋火や隣し〜く〜る乃四月

蓼我

年あこれおほさよ〜煙了楯の影

肖昔

やふ不あ〜謎とや〜り袋年

ナコヤ

而后

沖ひとおあれて遠よまの山

ミカ

卓池

雪のやい〜〜糸色しふるり

ナシヤ

牧子

眼あ〜移〜やふおひと川口

アツタ

朴丈

みまの目ふ庵建了地をえて置

都良

州の戸や雪のあ〜ふ〜

ナツ

五道

降〜つ〜さめ〜したる木立

其松

鐘の音れ〜〜指やを木立

禁鐘

物ほつ明自身もれ一を本立 大山 有車

せ戸門や之秋吹涼を鴨の聲 アツタ 呂川

なま〜〜す〜〜小鴨の枝水鳥 汝菜

追あげて千鳥鳴せん山嵐山 良妹

流れ草木のこぼれと白鳥〜小鴨が 宗古 ナコヤ

鴨鳴や挑灯て出るお節舟 紫黒 ナコヤ

登る央島の千世ふるや〜ふ並ひたり ナコヤ 井肩

ゆふゆふ〜〜水〜〜つるな千鳥 榮士

月寒〜〜けおひ鴨ハ明は アツタ 五柙

去〜あつや磨の糞す〜文〜 ナコヤ 松隣

鳴〜陸おをかり神乃冬の月 キノ 石羊

言月やあ〜お〜白き峰の空 ナコヤ 李競

鯨〜おをを〜〜や星此降 ミカハ 春子

白轉瓦夜明乃門のわう都 雨木

家痛ハ二三日梅此師をうか ナコヤ 駈六

客通は中〜〜もせお〜餅菜 志芳

元陽一やつそおくり冬の春
ナコヤ 鬼粒
 事ごとく少年の暮り磯輪る
ナコヤ 金樵
 人の無きみお柴ハちれとおふが
 佳當
 酒を酌を置そ鶴来よ冬のお

雜

海山乃りりき吹きよ松の風
ナコヤ 塊翁
 残雪をくまきりく作れ夕日哉
 沙鷗
 松風やせの中ふ事乃るおまの山
ミノ 青臺
 點りある人のきしすし結山
ヨハリ 千阿
 白きふ所をすむ雀のよなひ哉
 耕至
 畑小田小雀見ても長文塘哉
 峩鹿
 浮木ふも根木ふも亀の齧哉
 佳當

文
政
紀
元
戊
寅
冬
日

佳
當
輯

